

多くの出会いからエネルギーをもらった海外研修

大槻 好史

昨年12月末、教授から「海外研修に行く気はないか？」との電話があった。海外に一度も行ったことがなかった私は二つ返事で快諾した。この時点ではまだ申込の段階であったが、あれよあれよという間に事は進み、運良くこの企画のメンバーになることができた。しかしメンバーの中で後期研修医は私一人。事前のミーティングで「後期研修医なんだし症例発表やってもらいたいなあ。もちろん英語で。」と言われ、海外旅行気分は一気に吹っ飛んだ。私の所属する耳鼻咽喉科学教室では木曜日に学外から英語講師を招いて英会話教室を開いている。忙しさにかまけて入局以来数回しか顔を出したことがなかったが、毎回出席することになった。

出発前にたまたまNHKスペシャルというTV番組でシンガポールの特集をやっていた。シンガポールは東京23区程度の面積に480万人が住む都市国家で、最新の統計では一人あたりのGDPは3万5千ドルを超え、日本を抜いてアジアで最も豊かな国となった。政治は人民行動党一党支配で、日本以上に狭く資源もないこの国の急成長を支えているのは、独自の人材確保政策であり、リー・シェンロン首相のもと政府は「向こう20年間に200万人の高度専門人材の移民を受け入れる」という大胆な方針を発表した。現在は将来を見据え、バイオや環境などの研究開発分野で優秀な人材獲得に力を注いでおり、最新の研究施設には、クローン羊を生んだイギリスのコールマン博士や日本人の研究者が、破格の研究費と待遇で続々と集められている。一方で、この政策は冷徹な側面も併せ持っており未熟練の外国人労働者は家族を呼びよせることはもちろん、永住を防ぐため住民との結婚も許されないのだそうだ。私の初の海外旅行先はシンガポールとなった。

2月23日(月)シンガポール初日 Singapore General Hospital 見学



【メッセージが書かれた壁】

病院内は解放的で明るい雰囲気だった。廊下の壁には患者さんからのお礼のメッセージがたくさん書かれていた。まず救急外来を見学した。シンガポールにおいて緊急時の病院受診は、街の24時間クリニックや大きな病院のA&E(Accident and Emergency)で受け付けている。救急車を呼ぶと、料金が取られ、それも約1万3千円に相当する165シンガポールドルと極めて高い。搬送後に急を要しないと判断された場合、罰金まで課せられる。受診料も92年1\$→28\$+検査処置上限25\$、97年に一律70\$→現在80\$となったため、気軽に利用すると言うわけにはいかない。その背景は日本とあまり変わらず、緊急でない救急患者が救急外来に殺到するという現実に対処しようとしたための措置だという。「本当に必要な人が受診できない」という批判に対しては以下のように対処している。救

急外来でみる病状、みない病状の周知徹底(4ヶ国語でテレビ・新聞を使ったキャンペーン)、非救急の人のための深夜外来実施(夜 11 時まで)、救急外来も最優先(心臓発作や重症外傷)、準優先(手足骨折など致命的でないが重症)、捻挫や腹痛(命に直結しない)などの重症度を看護師の問診によって決定する、などである。また医師の勤務体制は3交代制で、日本のように日勤⇒当直⇒翌日も日勤などということはありません。次に病棟を見学した。医師は白衣を着ておらずコメディカルとの区別がつかなかった。また、ナースコールは廊下の天井に設置された電光掲示板に表示されるため、例のコールが頻繁に鳴り響くことはない。次に外来を見学した。シンガポールでは医師は GP(General Practitioner)と呼ばれる一般医と Specialist と呼ばれる専門医に分かれている。シンガポールではまず最寄りの GP の診察を受け、そこで解決しない場合は Specialist を紹介してもらうという形をとる。直接 Specialist を受診することもできる。耳鼻咽喉科外来は日本と同様、大変込み合うので他科よりも待合室のスペースは広めに作られていた。



【耳鼻咽喉科外来】

また外来には特別に Patient Education Library という患者教育のための小さな図書館のようなスペースが設けられており病気に対する理解を深めてもらおうという取組がみられた。耳鼻科のユニットや道具、レジデント一人あたり外来診察人数は一日平均 30 人～40 人という点は日本と変わらなかった。豪華な外来だなあと感じた点は、乳幼児聴力検査室があること、AUDIOMETRY ルームが 3 部屋ありそれぞれに ST がついていること、医者用のモニターだけでなく患者用のモニターが設置されていること、外来内に小手術室がありそこでチュービング、鼻レーザー手術などが行われていることなどであった。

シンガポール初日は今回の海外研修のメインイベントである英語での症例発表があった。私が発表したのは「Office-based video-endoscopic laryngeal surgery (外来局所麻酔下喉頭手術)」。昨年入局して以来、地方会で 2 回しか発表経験が無い上に、今回は英語でのプレゼンということで、医局の先輩方にはだいぶ助けてもらった。

発表は、Singapore General Hospital (以下、SGH) のレジデントに聞いてもらい発表後にディスカッションする形式で行われた。集まってくれた SGH のレジデントの専門分野は葛西先生の御配慮により私たちの専攻に合わせてもらっていた(耳鼻咽喉科、精神科、小児科、家庭医学 etc)。プレゼン自体は、原稿をしっかりとっていったので発音はともかく無難に終えたが、ディスカッションは全く駄目だった。SGH の耳鼻咽喉科のレジデントからは、「専門医になるためにどんな手術をどれだけ経験したか?という規定はありますか?」「手術のチェック機構はありますか?」などの質問があったのだが、上手く聞き取れ

ず、葛西先生に通訳してもらいながらのディベートになってしまい残念だった。その後、各々の専門分野同士で昼食を食べながらの交流会があり、開き直った私は、一生懸命、ジェスチャーや極簡単な英単語を並べて会話したら意外に通じたので少し嬉しくなった。調子に乗って話していたら会話が弾んだので、もっと詳しく案内してあげるよ！と誘われ、再度、耳鼻科外来に行き、オフィスで食後のコーヒーを飲みながら、耳鼻科レジデントとしての今現在の状況や将来の方向性について色々な話をした。

シンガポール 2 日目は SGH 内の Occupational Therapy 見学をした。Speech Therapy のセクションでまず驚いたのは ST のレベルが高いということだった。日本では喉頭ファイバースコープはまず耳鼻科医師



【プレゼンテーションの様子】

しかやらないのだが、SGH の ST は、喉頭ファイバースコープをやり嚥下機能の評価まで行っていた。他の科においても SGH ではコメディカルのレベルが高く、医師との役割分担がはっきりしており医師は主に診断と治療と全体のプランニングをするのだそうだ。

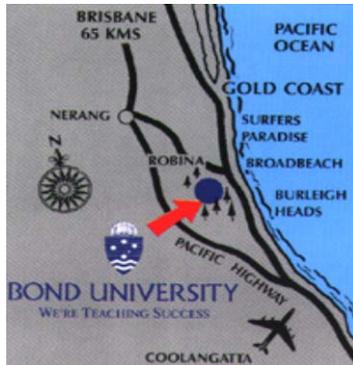
2月24日(火)の深夜便でオーストラリア・ブリスベンへ向かった。移民の国ともいわれているオーストラリアは、多民族、多文化、多宗教と多彩な国で、第3の人口を誇る都市・ブリスベンは、クイーンズランド州の首都で、人口は334万人。ブリスベン・シティーは、ブリスベン川を囲むような形で発展しており、バスやフェリー、電車といった公共交通機関が充実している。市内中心地は、碁盤目状に区画されており、クイーンズトリート・モールという歩行者天国のショッピング街を中心に栄えている。ブリスベンは亜熱帯性気候のため、1年を通して温暖で、日中最高気温が20度を下回ることはない。サングラスは必需品で紫外線は日本の5倍以上。街全体は高層ビルが立ち並ぶ大都市の様相だが、ビルの谷間には緑や公園も豊富に用意され、都会でありながらも自然の景観美を兼ね備えている。シドニーやメルボルンと比較すると、学費や物価が安いことから、長期留学生には最適の都市なのだそうだ。

2月25日(水)早朝にブリスベンに到着。

見学地 Queensland Health Skills Development Centre へはバスで向かった。バス停は地下鉄の駅のように大きかった。ブリスベンでは最近、バスウェイ(Bus way)と呼ばれるバス専用道路(サウスイーストバスウェイとインナーノーザンバスウェイ)が開通したことでバスが渋滞に巻き込まれることは少なくなったそうだ。

2月26日（木）

オーストラリア 2日目 The Gold Coast Hospital・Bond University 見学



ボンド大学家庭医学のジェニー教授の案内で Gold Coast へ向かった。ボンド大学（Bond University）は、オーストラリアで最初の私立大学で学部は 6 つ（ビジネス、健康科学&薬学部、人文学、IT、法学、医学）あり、特に法学部とビジネスが有名。また、医学部は 2005 年 5 月からスタートした比較的新しいコースとなっておりブリスベンから車で約 1 時間の Gold Coast にキャンパスを構えている。

ボンド大学医学部の講義に参加し、講義の後には学生の前で白田さんがプレゼン。その後、ボンド大学のクリス学長の計らいで、皆で豪華なランチを楽しんだ。



【医学部の講義】



【ランチの様子】

Bond University の医学生・アンさんは日本生まれの日本育ちのインド人女性で The Gold Coast Hospital や Bond University を案内してくれた。

その日の夕方、アンさんの家に招かれて庭でパーティを楽しんだ。下の写真は娘のジュジュちゃん。ちょっと恥ずかしがり屋の元気な女の子。またアンさんの家にはボンド大学に留学中の日本人姉妹が同居しており、お互いに色んな話をした。



【案内してくれたアンさん】



【アンさんの娘・ジュジュちゃん】

2月27日（金）

オーストラリア3日目

PRINCESS ALEXANDRA HOSPITAL 見学

レジデントによるモーニングカンファレンスに参加した。サンドイッチをほおぼりながら活発な討論が交わされた。

2月28日（土） 移動日

3月 1日（日） 移動日

3月 2日（月） 成田到着

今回の海外研修では色々な出会いがありその人たちからたくさんのエネルギーを頂いた。日本に帰ってきて2週間経ち時々写真を見ながら、シンガポールとオーストラリアで過ごした日々を思い出している。英語が出来ず、伝えたい思いを伝えられないもどかしさを痛感し、先日、プロゴルファーの石川遼くんが宣伝している「スピードラーニング」を始めてしまった。鉄は熱いうちに鍛えよ・・・次の海外に備えて頑張るつもりだ。

最後になりましたが、今回の海外研修でお世話になった、野崎さん、白田さん、鈴木さん、知識さん、吉成さん、Nollet 先生、大谷先生、石川先生、葛西先生、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします。



【シンガポール・チャンギ空港にてみんなと最後の晚餐】